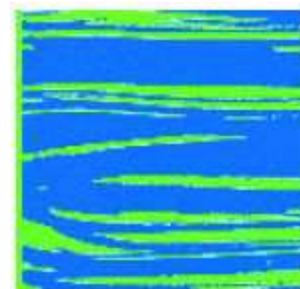


日本行動分析学会ニューズレター

J-ABAニューズ



2016年 夏号 No.83 (2016年7月28日発行)

発行 一般社団法人日本行動分析学会 理事長 坂上貴之
〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内
FAX : 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL : <http://www.j-aba.jp/>
E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

連載：行動分析学の道に入った理由(3)「スキナー箱に惹かれて」……………平岡 恭一
気配りと自粛・主張と我慢ーイギリス・サセックス滞在記ー……………吉野 俊彦
医療行動分析学研究会開催記：「医療行動分析学研究会」への期待……………鎌倉やよい
「医療行動分析学研究会」アルバム……………飛田伊都子
医療行動分析学研究会参加記：広がる行動分析の輪……………村井佳比子
第23回行動数理研究会開催記……………井垣 竹晴
ABAI2016 体験記：ABAI 第42回Chicago大会に参加して……………風間 梨沙
連載：いま、こんな職場で働いています(2)「産業心理現場に活かす行動分析学」……………坊 隆史
『行動分析学辞典』(出版企画)……………武藤 崇
社員総会報告……………山岸 直基
編集後記……………ニューズレター編集部

<連載：行動分析学の道にはいった理由(3)>

スキナー箱に惹かれて

平岡 恭一
(弘前大学)

「行動分析学の道にはいった理由」というお題で執筆を依頼されましたが、私は未だその道にはいりきれていないと感じています。編集部求真先生がそれでもよいと言って下さったので、「はいることを目指している者」として、私自身の来し方をふりかえてみたいと思います。発端はやはり大学の学部時代に遡ります。弘

前大学教育学部の卒論では動物の学習に取り組みましたが、100%の正解を目標とする一般的な弁別学習課題などではなく、漸近的行動が明確に決まっていない、選択行動に興味を持ちました。当時 M.E.Bitterman が中心になって進めていた学習の種差の研究の中で、確率学習課題が目を引き、迷路型装置とスキナー箱にお

けるラットの選択行動を比較したのがそもそもの始まりだったように思います。

この卒論実験を通して、何故かスキナー箱に惹かれるものがありましたので、広島大学大学院に進んだ私は、確率学習の実験をスキナー箱で続けることにしました。ところが当時広島大学の実験室には選択行動が研究できるレバーを2つ備えたスキナー箱がありません。指導教授の命により、私はそれを一から作るようになったので、広島市東雲にあった学校教育学部（教員養成）の技術科の先生に弟子入りし、研磨、ねじ切り、溶接など、金工の基礎を学び、本格的な実験装置の作成のため、毎日通いました。これは思いがけない経験で、模型作りが趣味だった私にはとても幸せな時間でした。試行を区別するいわゆる統制オペラント場面の実験だったので、レバーを出し入れするのに、鉄道模型のHOゲージの台車にレバーとマイクロスイッチを搭載し、レールに乗せてソレノイドで操作する世界でひとつだけのマイ・スキナー箱が完成したときは、うれしくて飽かず眺めていたものです。

修士論文ではこの装置を使い、確率学習における訂正法の効果について実験をしました。この研究自体はまだ行動分析学の領域に属するものではありませんでしたが、文献を調べていく中で、確率学習の研究が、その後行動分析学の主流のひとつとなるオペラント選択行動の研究へと引き継がれていったことを知りましたこの頃、広島大学にいた関係で、河合伊六先生に会いました。スキナー箱で実験していることを話すと、「私の関心はハルとスキナーです」と言っておられました。当時広島大学の関係者でスキナー関係の研究をしている人はいませんでしたので、とても新鮮で、うれしかったのを覚えています。

大学院博士課程1年を終えて、母校の弘前大学に助手として奉職しました。ここでも動物実験ができたので、教授の実験の手伝いをしながら、ラットの選択行動の研究を続けることにし

ましたが、この段階ではまだ行動分析学の意識はなかったと思います。この頃（1980年）英国ヨーク大学のG.Hall氏のところに2ヶ月余り滞在したことがあります。その時マンチェスター大学でInternational Symposium on Recent Developments in the Quantification of Steady-State Operant Behaviourが開催されたので、Hall氏、J.Pearce氏などとともに出かけました。このシンポジウムではCatania先生などの大御所をはじめ、W.M.Baum先生やC.P.Shimp先生など、選択行動研究で有名な錚々たるメンバーが発表していたので、今考えるとすばらしい出会いだっただけですが、当時の私には猫に小判であまり興味が持てず、お昼にパブで食べたチーズとパンとワインの思い出の方が残っています（もったいない！）。

それから数年して、文部省在外研究員（長期）として海外の大学に行けることになりました。行き先は迷いましたが、当時選択行動の微視的分析をアクティブに進めていた米デューク大学のJ.E.R.Staddon先生のところで勉強することにしました。ところが先生は私の滞在期間のほとんどをドイツ、ルール大学のDelius先生のところでも過ごすことになり、私はStaddon先生とはあまり交流できませんでした。ただ、当時ポスドクでいたJohn HornerやKen Steeleらと毎日のようにディスカッション出来たことは有り難いことでした。その後Staddon研究室には現日大の真邊先生が留学され、その折には日本にいる私とメールのやりとりをしましたが、これもまたアカデミックで意義深いものでした。

Staddon's Labではハトの離散試行選択行動における微視的体制化と巨視的最大化を組み合わせた実験を行いました。と同時にオペラント選択行動関係の文献を徹底して読みましたが、必然的にJournal of the Experimental Analysis of Behaviorに掲載された論文を多く読むことになりました。これをきっかけとして、急速に行動分析学に接近していったように思います。帰国後弘前大学にStaddon's Labを

参考にしてハトの実験室を開設し、本格的にオペラント選択行動の微視的分析を始めました。でもまだ、日本の行動分析学の研究者とはほとんど交流がありませんでした。そんな中、日本心理学会でポスター発表をしているときに伊藤正人先生がひょっこり見えて、「今度研究会を始めるんだけど、来ない？」と誘ってくださいました。それが不確実性研究会（のちの行動数理研究会）の第1回でした。慶応大学地下の会議室で、初めて坂上貴之先生にお会いしたのもその時でした。その後の私の研究生活は、この会抜きには語れません。ほぼ毎回出席し、選択行動を含む実験的行動分析の多くの研究に触れることができました。あの時の伊藤先生の一言がなかったらと思うと、本当に感謝に堪えない次第です。

その後、主に行動数理研究会との係わりの中から、明星大学（1995年）や西南女学院大学（2001年）での行動分析学会年次大会にシンポジウム等の話題提供者として呼ばれるなど、学会での活動が増えていきました。その過程で行動分析学研究会の編集委員に加えていただいたことも行動分析学の道にさらに近づく一歩だったと思っております。

これまで述べてきたスキナー箱との係わりの中で、強く感じたことがあります。それはこの実験装置が「落ちこぼれ」を生まない装置だということです。この装置でネズミの実験をした人はわかると思いますが、予備訓練としてレバー押し訓練をすると、ほとんど全被験体が学習出来て、本訓練に移れるのです。この点は他のタイプの実験装置、例えば直線走路や迷路タイプの装置と比べるとよくわかります。走路や迷路のいわゆる移動（locomotion）反応を用いる装置では、ネズミの中には出発箱から出ることが出来ないなどにより、本実験に移れない被験体が必ず何匹かいました。これは海外で行われた実験でも見られたことのように、英語の論文の中で、被験体を discarded（捨てた）という表現を少なからず見ました。折角用意した実験

動物を捨てなくてはならないことがなんだか悲しかったのと、ある限られた被験体の結果が出てきているのではないかと思ったことを覚えています。そのような、必ず全員が学習出来るというスキナー箱の特徴が、それを基に開発されたプログラム学習の原理に通じるように思われ、スキナーの学習観の大きな特徴なのだと感じています。このことは教育学部の授業で学習指導について講義するときに協調している点でもあります。

さて、以上述べた出来事はすべて私の行動分析学への道につながったように思います。その結果私は最近になって漸く行動分析を意識し始めました。自己紹介などで自分は行動分析を勉強していると言うようになりまし、授業でも簡単な行動分析の紹介をするようになりまし。そうやって初めて、自分がいかに行動分析学について学んでいないかを思い知らされました。その頃から、スキナー箱での動物実験だけではなく、応用行動分析の勉強をする機会も増えてきました。そのひとつは、以前から弘前市に「弘前応用行動分析研究会」なる勉強会があったことです。主に養護教諭や障害児の親御さんで構成されていたその会に呼ばれて行動分析の基礎を講義することになりました。合間に会員との雑談の中で、養護教諭としての高校生の指導に行動分析を生かした経験を聞くことが出来ましたが、それはまさに生きた行動分析でした。坂上先生や鎌倉やよい先生が弘前に来られた時にこの会と交流したこともよい思い出です。

大学院での私の講義には特別支援関係の専攻学生が多く受講してくれたので、杉山先生他著「行動分析学入門」や、アルバート&トルーマン著「初めての応用行動分析」などを改めて読み直し、行動分析の基礎を勉強しました。この3月、教育学部を定年退職しましたことにより、授業という形ではできなくなりましたが、勉強会として継続しております。現在、中野良顯先生訳「応用行動分析学」を読みつつ、討論しており、楽しい時間となっております。

学部の演習の授業では、スキナーの A case history in scientific method (Koch, S. (Ed) 1959 Psychology: A study of science, Vol. II) を学生と読んでおります。この論文は走路型装置からスキナー箱への発展を示す部分がよく引用されますが、そのほかにも興味深い部分がたくさんあることを知りました。はじめは関わっていた実験計画法と統計を用いるアプローチから離れ、個体行動の視認を重視するようになった経緯や、間歇強化の発想を得たのが、ペレットが足りなくなったけれども週末に作りたくなかったことがきっかけらしいことなど、興味は尽きません。特に、「測定の前に変動の原因をどれだけ排除できるか」というフレーズを目にしたときには、変動（個人差）を含むものとして測定をし、測定後に統計的に変動を分離することによって法則性を見いだそうとする、スキナー以外の研究アプローチとの明らかな対比がここにある！と感動してしまいました。

客員教員をしている放送大学のゼミでは、私も年をとりましたので、スキナー&ヴォーン著「初めて老人になるあなたへ」(大江聡子訳)をテキストにして話し合っています。この本から

は、行動分析の立場から老いにどのように対処していけばよいかのヒントを学ぶことができ、これもまた楽しい時間となっています。これらの学習活動を通じ、ますますスキナーの人柄や考え方に惹かれることが多くなってきたようです。

私がいる青森県では行動分析学はあまり盛んであるとは言えません。大学教員で行動分析学会員としては北里大学（十和田市）の松本明生先生がおられ、公私ともにお付き合いいただいて心強く感じておりましたが、この春の転出により、私一人になりました。また、特別支援関係公立学校の教員で強い関心を持つ人がおりますが、多くはありません。今後は私自身が行動分析学の勉強を進めつつ、大きなことを言うようですが、ここ青森の地に行動分析学を根付かせるよう微力ながら努力していきたいと思っております。その意味では、一昨年、弘前大学で年次大会を開催したことは有意義なことでした。冒頭述べたように、私はまだまだ行動分析学の道に入ったとは言えませんが、今後ともできるだけ近づいていきたいと思っております。

気配りと自粛・主張と我慢

～イギリス・サセックス滞在記～

吉野俊彦

(神戸親和女子大学)

1. Graham Davey@University of Sussex

この原稿を書き始めた数日前にイギリスは国民投票によって EU 離脱を決めた。私も楽観していたのだが、どうしてこのようなことになったのか、直前の小強化が遅延大強化を上回ってしまったのか。造語である Brexit はすでに Bregret という新たな造語を産んでいるよ

うに、大きな禍根を残すだけでなく、不透明・不安定な近未来に対する疑惑は、離脱派にも広がっているようである。

閑話休題。2015年8月より2016年3月まで、神戸親和女子大学の在外研究員プログラムによって、Brexit がまだ現実的なものとしては語られていなかったイギリスの University of

Sussex (以下 US、決して United States にはあらず) に客員研究員 (Visiting Scientist) として滞在した。ホストプロフェッサーは Graham Davey。彼は行動分析家とは呼べないが、City University (London) で動物実験を行い、彼の Ecological Learning Theory (1989) には、博士後期課程に在籍していた私自身も大きな影響を受けた。また、私が修士 2 年時に、木村裕先生 (早稲田大学) が在外研究先に選んだのも City University にいた Graham だった。

彼の特徴は大きく 2 つにまとめられる。まず、Indiana 大学の Timberlake などと並んで、行動システムのアプローチに立っていたこと。生物学的な制約を前提として、状況に応じてよりハイアラキーの高い反応がその個体の行動のレパートリーの中から生じる、そして行動随伴性によってそうした行動システムがダイナミックに変化する (これが学習である) という考えは、私の基礎研究や臨床活動に今でも通底している。もうひとつは、US に異動した 1990 年代半ばからは動物実験を離れて認知行動療法として括られる臨床研究 (但しケースを持って臨床活動をしているわけではない) を行っていることである。数多くの論文の他、Psychopathology (2014) を代表とする教科書、さらに電子ジャーナルであるが、Journal of Experimental Psychopathology を 2010 年に立ち上げて、現在も編集者として年に 4 号発刊している。基礎研究をベースとしたものであり、まだ動物実験で精力的に活動していた彼に臨床を薦めたのはあの Hans Eysenck なのだそう。ちなみに、その Eysenck は私にとっては University College London の大先輩でもある。

彼はすでにリタイア可能な年齢に達していたのだが、在外にという私の希望を受けてもう 1 年間退職を延期してくれたのはいくら感謝してもし足りない。そのような状況であったためにすでに指導学生はすべて学位取得するなどして US を離れており、若い人たちとつながりができなかったのが残念と言うと贅沢

過ぎるだろうか。

さて、US は比較的若い大学である。1961 年に開学し、London から 100km 足らず南下した Brighton and Hove の市街から South Downs と呼ばれる典型的な England の美しい丘陵との境界に広大なキャンパスを有している (Brighton and Hove の外れの丘、Devil's Dyke から北に広がる眺めを、画家の Constable は the grandest view in the world と呼んだ)。すでにノーベル賞受賞者を 3 名輩出し (いずれも US の卒業生ではないが)、心理学科はイギリスでも最も規模の大きな School のひとつで、Mackintosh と Hall はここで教えていたし、Dickinson は学部の卒業生、Pearce は PhD を US で取得しているなどイギリスの学習心理学の大家も関わりが深い。

2. ヨーロッパにおける行動分析学

2012 年のヨーロッパ行動分析学会の報告 (吉野, 2012) でも触れたように、ヨーロッパにおける行動分析学は日本と比較しても盛んとは言えないが、確かに発展しつつある。この項では、発展しつつある様相をまとめる。

今回の在外研究中的出張は 4 回。Bratislava (Slovakia) での講演会、London での研修会、Athens の Panteion University にいる Robert Mellon の研究室訪問、そして Galway (Ireland) での研修会である。London での講演会は元 ABA-I 会長の Pat Friman (University of Nebraska School of Medicine) をイギリス行動分析学会 (UK-SAB) が Speakers' Series の一環として招待したもの、2 日で£150 (当時の為替レートで約 28,000 円)。Galway はアイルランド心理学会が企画した研修会で、1 日で€ 120 (約 15,000 円) だった。Bratislava は日本にも知り合いが少なくないと聞いている Karola Dillenburger (Queen's University of Belfast) と Michael Keenan (Ulster University) が、東欧の発達障害の介入方法として ABA を広めようとする活動の一環だった。閑散としているの

ではという危惧は全くの杞憂に終わり、200名程度の座席では足りず立ち見も出る盛況ぶりだった。うち、7~8割が女性。この後は Brno (Czech) でも同じ企画 (こちらは予約が400名を越えていたそう) があり、その後、Karola と Michael は現地の大学の研究者を交えて文科省の関係者と懇談したと伺っている。もともと行動分析学が比較的盛んだった Poland だけでなく、こうした東欧諸国にも ABA を中心として広がりつつある。そしてそれは BCBA の資格取得と関わりが強いように感じる。London の講演会も BCBA の更新ポイントを獲得できることもあってか参加者は数多く、BCBA や BCaBA の数も確実に増加している。BCBA は、2018 年度から導入が決定している我が国の公認心理師制度とは別に、行動分析学会でも導入を議論しなければならない時期にあるように感じている。また、ヨーロッパ行動分析学会 (EABA) は隔年での大会に加えて夏の学校を始めた。EABA のメーリングリストからは、発達障害の介入ができる募集が少なくない頻度で届けられる。そのように確実にヨーロッパにおける行動分析学は広がりを見せつつある。なお、過去の状況については Hughes (2007) や Hughes & Shook (2007) などに詳しい。

今後の発展は十分に期待できるのだが、もともと盛んな Ireland や Wales に比べて England はまだまだ発展途上のように見える。Experimental Analysis of Behaviour Group (EABG) は 60 年代に立ち上がったものの、行動分析学よりも連合学習が盛んで神経科学とのつながりを強めているし、BCBA の養成機関は 2016 年現在 University of Kent だけである。あくまで仄聞をまとめた私の印象に過ぎないが、影響力のあった一人の医師が、行動分析学や自閉症についての誤解を広めたことが発展を阻んでいる要因の一つだったと考えられそうである。一方、日本では Clinical Psychology の訳語として臨床心理学と心理臨床学が混在

している。日本の臨床心理学の現状が私にはガラパゴス化しているように見えるのだが、その原因も似たようなものと言えないのだろうか。

3. 多様性と疎外

帰国して会う人ごとに「大丈夫でしたか」と訊ねられた。意味するところはテロに関する危険である。Hamburg に住む友人を訪ねて戻るルートに Brussel を選んでいたのだが、その 2 週間前に例の事件があったために、結局電車を諦めて飛行機で帰国した。それ以外は日々の生活の中で危険を感じることはなかった。Paris でのテロ以来、観光客が激減したのは日本からだけだったようで、日本人は過剰に反応しているようにも見える。地震大国、台風などの被害も甚大な国なのだが、だからといって日本を出てしまおうという人が多くないと同様に、ヨーロッパも局所的に被害があったとしても過剰に反応することはない。ちょうどテロ行動を消去しているように見えなくもない。

日々の生活の中で日本と決定的に違ふと感じられるのは多様性である。肌の色や聞こえてくる言葉が様々なのは、Brighton and Hove でも同じである。今回の在外には家族も同行したのだが、日本だと小学校 5, 6 年生の二人の子どもたちは 11 才を越えているということで、現地の Secondary school にダブルデッカーで通った。子どもたちが経験したことも、行動分析学の視点やいじめの問題などと絡んで興味深いのだが、彼らが出会ったクラスの同級生は、イギリス人だけでなく、西欧諸国はもとより、東欧、中近東、アフリカ、中国など様々である。いわゆるダブルも少なくない。町を歩けばヒジャーブをかぶった女性、韓国、中国などアジア系も少なくない。US へも全世界から留学生が集まっている。子ども時代からそうした多様な友人・隣人がそこにいること、彼らとの関わりは多様性についての考え

方を大きく左右するだろう。

もう 20 年近く前になる London での 3 年間の生活も、今回の Brighton and Hove での半年間も居心地がとてもよかった。もちろん、銀行口座の開設、ネット環境の準備、子どもたちの学校の選択、そしてそもそもビザの取得などなど問題は少なくなかった。それでも言葉を含めた不自由さを考慮しても全般的には日本よりも居心地が私にはよかった。その大きな理由の一つはこの多様性に由来するのではないかと考えている。

多様性は肌の色や話される言葉だけでなく、考え方の違いや生活スタイル、趣味趣向などなどこれまた多岐に亘る。一人ひとりが違っていることを前提として、それによって生じる主張の違いを尊重することで自分も尊重されるという関係が背景にある。イギリスでも日常生活の様々な場面でちょっとした我慢を強いられることが少なくない。イギリス名物 Long Queue はスーパーのレジやバスに乗り込もうとするときにも見られる。そうした状況でもレジの店員と世間話に興じている客、バスの運転手に行き先などを長々と尋ねる乗客、日本であれば「ちょっと速くしてよ」というノイズが被さりそうな場面でも平然としている（ように見える）。そういえば、町中でクラクションを聞くことがほとんどない。そうした小さな我慢によって多様性の結果として生じる主張は支えられているように見える。多様な主張を尊重することで、一人ひとりが守られているように見える。それに対して日本では……。敢えて言語化すれば、気配りと自粛とでもなるだろうか。そこにあるのは萎縮と窮屈さ。

4. おわりに

多様性を認める文化であったはずのイギリスがそれ故に揺れている。行動の変動性は個人の適応を支える重要な要因の一つ、そして思想や生活スタイルの多様性は社会の住みや

すさを支える重要な要因の一つ。イギリスはまた、あの紳士然とした裏側に潜む傲慢さや尊大さを見せながらプライドと偏見の時代に戻ってしまおうとしているのだろうか。もしそうだとすれば、その直前の機会となった今回の滞在はやがて良き時代と再び訪れるだろう没落時代との境界期だったことになってしまいが、イギリスを愛する者の一人としてそれが杞憂に終わることを願わずにはいられない。

この後に及んで書き添えておく。US 滞在中に実験を 2 つ行った。これらについては本年度の行動分析学会の年次大会、ヨーロッパ行動分析学会の隔年次大会などで発表予定である。ちなみに後者は Sicily の Enna (標高 931 m) で開催されるが、ニューズレター編集長からは報告記をすでに要請されている。

最後になるが、学生数が 2,000 名足らずの小さな大学である神戸親和女子大学に在外研究のプログラムがあり、様々な補助をいただくことができた。ここに記して感謝したい。

引用文献

- Davey, G. (1989). *Ecological Learning Theory*. London: Routledge.
- Davey, G. (2014). *Psychopathology* (2nd ed.). Hoboken, NJ: John Wiley.
- Hughes, J.C. (2007). The Experimental Analysis of Behaviour Group, UK and Europe. *European Journal of Behavior Analysis* (EJBA), 8, 105 - 107.
- Hughes, J.C. & Shook, G.L. (2007). Training and certification of behaviour analysts in Europe: Past, present, and future challenges. *EJBA*, 8, 239 - 249.
- 吉野俊彦 (2012). 混沌、若さ、ルールと行動随伴性 : ヨーロッパ行動分析学会リスボン大会に参加して 日本行動分析学会ニューズレター J-ABA ニュース, 67, 10-13.

<医療行動分析学研究：開催記>

「医療行動分析学研究会」への期待

鎌倉 やよい

(日本赤十字豊田看護大学)

日本行動分析学会理事長、行動リハビリテーション研究会のご了解のもと、「医療行動分析学研究会」を2015年3月7日に設立し、第1回研究会を開催いたしました。

これまで、多くの看護職が行動分析学を学んできましたが、いつの間にか学会から離れていきました。看護学領域では、「患者行動の変容」(医歯薬出版, 1975)、「ナースのための行動療法；問題行動への援助」(医学書院, 1982)が訳書として出版されました。同時期に、看護教育にBS・ブルームによる完全習得学習が導入され、「看護教育における行動目標と評価」(医学書院, 1980)が訳書として出版されるなど、行動が注目されましたが、行動の原理、シングルケース研究法は定着することなく消えていきました。

しかし、2014年に第34回日本看護科学学会学術集会を会長として開催するにあたり、事前に「看護ケアプログラムの体系化に向けて；看護研究と行動分析学」(看護研究, 47(6))の特集を企画して発行し、学術集会には行動の原理、シングルケース研究法などを色濃く企画したところ、その評価も高く受け入れられた感がありました。看護学において行動分析学の地盤を固めるには、今が好機であると考えられました。一方、日本は超高齢社会に突入し4人に1人が65歳以上の高齢者です。2014年には介護保険法改正により「地域包括ケアシステム」が提唱され、介護予防として高齢者自身が生活機能を維持ように求められています。そのためには、対象者が健康をセルフマネジメントできるよう

にする技術が必要であり、看護職のみならず広く医療や介護、福祉サービスの専門職が行動の視点を有することが重要です。このような視点から「医療行動分析学研究会」と命名した研究会を設立し、医療・福祉場面における行動分析学的研究とその成果を共有することを目的とし、多職種が相互に研鑽することができる場といたしました。

さて、第1回医療行動分析学研究会では22名の参加でしたが、2015年3月6日(日)に愛知県立大学守山キャンパスで第2回研究会を開催し45名の参加がありました。1年で倍増したことについて、意見交換の場が求められていたことを実感いたしました。午前中に、日本行動分析学会理事長の坂上貴之先生(慶應義塾大学)による「目からウロコの行動分析学」と題した教育講演がありました。行動分析学の基礎を具体的にわかりやすくご講演いただきました。午後には、一般演題として以下の4題の発表がありました。20分発表後、20分の意見交換の時間をとりましたが、活発な意見交換によって充実した時間となりました。

- 1) 「慢性疼痛患者の疼痛行動に対する行動的介入—紙とペンでできる医療—」 笠原諭¹, 杉山尚子² (1 東京大学医学部附属病院, 2 星槎大学大学院教育学研究科)
- 2) 「通所リハビリを利用する高齢者に対する口腔ケア教育プログラムの効果」 藤野あゆみ¹, 百瀬由美子¹, 天木伸子¹, 鎌倉やよい¹, 山本さやか² (1 愛知県立大学, 2 日本福祉大学)
- 3) 「デブリーフィングを用いた人工呼吸器学習

会の有効性」畔柳信吾（公立西知多総合病院）
4) 「集中治療室看護師における点滴安全確認行動の実態から考案した介入プログラムの有効性評価」山田利恵¹，飛田伊都子²（¹ 三菱京都病院，² 滋慶医療科学大学院大学）
今後の予定として、意見交換を中心とした研究会を年に1回開催いたします。ホームページも開設するように検討しています。医療・福祉領

域において行動の原理が活用され、シングルケース研究法を定着させたいと思いますので、ご支援いただきますようお願いいたします。

世話人：鎌倉やよい（日本赤十字豊田看護大学）
幹事：飛田伊都子（滋慶医療科学大学院大学）
事務局：滋慶医療科学大学院大学飛田研究室、
e-mail：koudou2015@yahoo.co.jp

「医療行動分析学研究会」アルバム

飛田伊都子
（滋慶医療科学大学院大学）

第2回医療行動分析学研究会の教育講演と一般演題の発表について、その概要を紹介します。日本行動分析学会理事長である坂上貴之先生に「目からウロコの行動分析学」というタイトルでご講演頂きました。行動分析学を学ぶ人向けに、「（1）なぜ行動の原因を、心的实在、心的構成概念、生理的概念から考えてはいけな
いか。行動分析学では行動の原因をどうとらえるか。行動を理解するとはどういうことか。（2）行動はどのように定義できるのか。（3）随伴性とは何か。（4）行動分析学は実験計画と随伴性からなり、実験計画としての反転デザインであるABAデザインと、随伴性の整置としてのABC分析や随伴性ダイアグラムを混同しないこと。（5）オペラント条件づけの本質は分化強化にあること。」など、行動分析学の基本的な概念を、

様々な視点からお話になりました。

午後の一般演題では4演題が発表され、いずれも医療現場における研究の報告でした。第1演題は「慢性疼痛患者の疼痛行動に対する行動的介入：紙とペンでできる医療」であり、疼痛を「疼痛行動」と捉え、行動随伴性を明らかにし、疼痛行動の軽減を目指した介入研究でした。5症例に対する介入が報告され、起床時刻やPC作業時間、痛みを理由とした在宅日数、収入月額、数値評価スケール、勉強時間、安静時間、学校活動時間、バイト時間、症状の訴えの回数等を従属変数として種々の介入評価が報告されました。第2演題は「通所リハビリを利用する高齢者に対する口腔ケア教育プログラムの効果」であり、高齢者が正しい歯磨きの方法を習得し、継続することを目指した介入研究でした。独立変数を

口腔ケア教育プログラムとし、歯垢染色液によって赤く染め出された歯面数を総歯面数で割ったプラークコントロールレコード（PCR）を従属変数とし、ABデザインによってプログラムの有効性が評価され、20名のうち13名のPCRが減少したことが報告されました。

第3演題は「デブリーフィングを用いた人工呼吸器学習会の有効性」であり、人工呼吸器のアラーム対応を身に付けるための効果的な学習方法の設計と実施を目的に行った研究でした。病院に勤務する23名の医療者を対象にマルチベースラインデザインを採用し、シミュレーションのみを行うベースライン期と映像を用いたデブリーフィングを追加する介入期を設定し、アラームに対する対応スキルの上昇率を評価した結果、上昇率の増加が報告されました。

第4演題は「集中治療室看護師における点滴安全確認行動の実態から考案した介入プログラムの有効性評価」であり、集中治療室に勤務する看護師を対象に点滴確認行動の実態と必要性の意識調査を行った第1研究と行動の実態から考案されたプログラムの有効性を評価する第2研究から構成されました。第1研究では、点滴確認行動の必要性を認識しているが遵守されていないことが明らかになり、第2研究では、看護師自身の点滴確認場面をビデオ視聴および確認行動のスコアフィードバックと言語的賞賛を行った結果、遵守率が増加したことが報告されました。一般演題ではそれぞれ約10～20分間の参加者との十分なディスカッションが行われ、我々医療者の新たなアルバムの一ページとなりました。

<医療行動分析学研究：参加記>

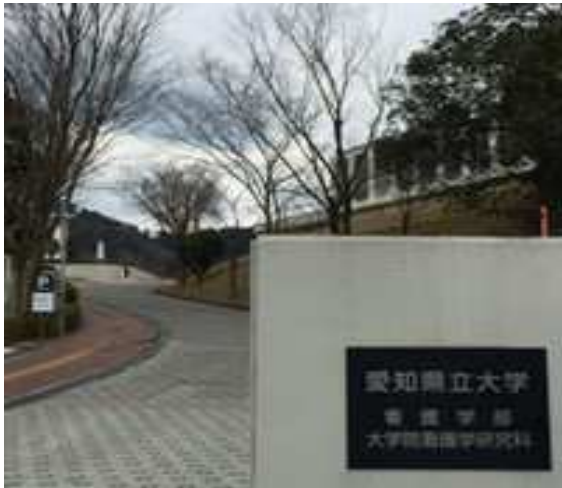
広がる行動分析の輪

村井佳比子

（相愛大学・神戸学院大学非常勤講師）

去る2016年3月6日、愛知県立大学守山キャンパスで第2回医療行動分析研究会が開催されました。この研究会は「医療現場にもっと行動分析を」という愛知県立大学教授の鎌倉やよい先生の熱意が形になったもので、行動分析学の基礎研究の先生方もご参加くださり、昨年行われた第1回研究会にも増して活発で楽しく有意義な会となりました。

午前中は慶応義塾大学教授の坂上貴之先生から「目からウロコの行動分析学」と題して教育講演が行われました。何故“行動”をとらえる必要があるのかというお話しに続いて、行動の定義についてのダイナミックなご意見をうかがうことができました。行動そのものが生物個体であることの特徴の1つであり、観察者が対象



としている個体の変化はすべて“行動”で、操作対象を“環境”とするのが適切ではないかということ、さらに加えて言うなら、観察者は対象と完全に切り離れた存在にはなれないので、対象の変化は研究者の行動に影響を及ぼす環境と言えるとのこと。行動分析を学び始めてから何度も目からウロコ体験があり、そのつど行動分析の先生方には私には見えない世界が見え、私が感覚的に理解していることを的確に言語化しておられると感じていましたが、坂上先生のお話をお聞きした時、なんてダイナミックな世界が見え、それを見事に表現されるんだろうと敬服しました。この世に定点は存在しない、だからベースラインをとらないといけないと、今更ながら深く納得しました。



午後からはバラエティに富んだ興味深い4つの発表がありました。ひとつ目は東京大学医学部附属病院の笠原諭先生による「慢性疼痛患者の疼痛行動に対する行動的介入」で、“痛み”を「ベッド横になっている時間」「起床時間」「在宅日

数」「夫への不調の訴えの頻度」といった“疼痛行動”としてとらえて可視化し、痛みのために止めてしまった“健康行動”が増えるように介入した事例を報告いただきました。どの患者さんも10年、それ以上の疼痛行動のベースラインがありましたが、介入後にドラマチックに疼痛行動が減少していました。効果の秘密について懇親会でお話をお伺いしたところ、“動機づけ面接”を学んでからさらに驚くほどの効果が得られるようになったとのこと。動機づけ面接と行動分析を組み合わせることで強力な効果が得られるのではないかとのことでした。

ふたつ目は愛知県立大学の藤野あゆみ先生による「通所リハビリを利用する高齢者に対する口腔ケア教育プログラムの効果」でした。厚生省から提示されている高齢者の介護予防には、①運動器の機能向上、②栄養改善、③口腔機能向上、④閉じこもり予防、⑤認知機能低下予防、⑥うつ予防の6つが挙げられていますが、中でも口腔機能の向上は身体活動や栄養状態の改善に深くかかわるものであり、ひいては閉じこもりや認知機能、うつの予防につながる重要な要になっているとのこと。研究では高齢者が口腔ケアを自身で継続できるように「口腔ケア教育プログラム」を開発し、その効果を歯に残った歯垢染色液の面積を従属変数として丁寧に検証されていました。データを取るときに苦労話なども拝聴することができ、自己チェックできる歯磨き粉の開発が必要ではないか、3回磨くのと1回丁寧に磨くのとどちらが効果的かなど、よりよいプログラムにするための発展的なディスカッションが行われました。

3つ目は西知多総合病院・日本大学大学院の畔柳信吾先生による「デブリーフィングを用いた人工呼吸器学習会の有効性」で、人工呼吸器の使用頻度の少ない医療スタッフへの実用的な人工呼吸器学習プログラムの開発とその効果を検証するものでした。これまでの人工呼吸器の研修の問題点を丁寧に整理しておられ、これまでの研修ではフィードバックによる強化が不

足していることをわかりやすく提示し、いかに現場のスタッフが不安を抱えているかを明確にされていました。新たな操作のフローチャートを作成し、シミュレーション訓練を撮影した映像を使ったデブリーフィングの有無で効果が変わるかを測定するなど、大変意欲的な研究で、Prezi を使ったプレゼンもとても美しくて見ごたえがありました。発表後のディスカッションでは臨床で実験を行う場合の工夫について意見交換があり、新たな測定方法の情報交換をしましょうと盛り上がっていました。

最後の発表は三菱京都病院・滋慶医療科学大学院大学の山田理恵先生による「集中治療室看護師における点滴安全確認行動の実態から考案した介入プログラムの有効性評価」でした。安全確認行動はしなくてはいけない業務の一部であると学び、必要性は十分に分かっている、実際には実行していないことがあるとのこと。研究では「指差し呼称」を取り上げ、その必要性を講義によって“教育”した場合と、点滴投与時の録画を見た後に、できている部分についての言語的賞賛を得た場合とでは指差し呼称の頻度に違いが出るかを測定されていました。指差し呼称の必要性についての講義を聞いた後はむしろ頻度が低下するという興味深い結果がわかるとともに、社会的強化を用いた介入の重要性が改めて理解できました。懇親会では指差し呼称をカッコいいパフォーマンスとして定着させるのはどうかなど、熱く語り合っていました。

4つの発表に共通していることですが、いずれも適切な行動を強化することに重点が置かれています。坂上先生が教育講演の中で「オペラント条件づけの本質は分化強化にあり」とおっしゃっておられました。正にその本質を医療現場で生かすことを目指した研究内容でした。この研究会は北からも南からもできるだけたくさんの方のご参加いただきやすいようにと、名古屋で午前11時という少し遅めの時間から開始することになったそうです。懇親会も午

後7時には終了し、私も余裕で大阪に戻ることができました。このような時間配分などのきめ細かい配慮がとても嬉しい研究会でもあります。世話人である鎌倉やよい先生は愛知県立大学をご退官されますが、引き続き研究会を支えてくださるとのこと。伊藤正人先生をはじめとする行動分析の基礎の先生方や杉山尚子先生のご協力を得て急速に発展しつつあり、置いていかれないように私も学び続けなければと思いました。



最後になりますが、ご多忙な中、研究会の幹事としてきめ細かなお世話を笑顔で絶やすことなく担ってくださった慈慶医療科学大学院大学准教授の飛田伊都子先生に心から感謝申し上げます。



第23回行動数理研究会：開催記

井垣竹晴
(流通経済大学)

第23回行動数理研究会が、2015年8月31日(月)に慶應義塾大学三田キャンパスにて開催されました。もう1年近く前に開催された研究会ではありますが、開催報告をさせていただきます。

開催報告の前に、行動数理研究会の簡単な紹介をさせていただきます。本研究会は、行動の数理的・定量的分析に関心を持つ研究者間の情報交換や研究促進を目的として、大阪市立大学の伊藤正人先生と慶應義塾大学の坂上貴之先生によって始められました。現在は、坂上先生を代表として、私と佐伯大輔先生(大阪市立大学)が幹事としてサポートしています。研究会の主な活動内容は、年1回開催している研究集会で、例年、日本心理学会か日本行動分析学会の前後に開催しています。本研究会は、20年以上続いており、それなりに歴史の古い研究会と言えるのではないのでしょうか。研究会の成り立ちや変遷については、坂上先生がニューズレターに寄稿された記事「いま、こんな研究会しています(5):行動数理研究会」(2012年秋号 No.68)を御覧ください。また研究会のこれまでの開催記録や講演資料については、研究会のホームページ(<https://sites.google.com/site/jpsqab/>)をご参照ください。

さて第23回の研究会は、4名の方に話題提供いただきました。午前に教育セッションとして酒井裕先生(玉川大学)にご講演いただきました。午後は順に、折原友尊氏(明星大学)、時曉聰氏(慶應義塾大学)、八賀洋介氏(慶應義塾大学)に研究発表をしていただきました。

酒井先生には、「行動科学としてみる強化学習理論の明と暗」をタイトルとして、強化学習

理論について初学者を対象に平易に解説いただきました。講演では、工学的な理論から派生し体系化された強化学習理論が、動物行動を理解する枠組みとして有効に活用できるかどうかについて、これまでの強化学習理論の研究事例をもとに、その可能性が述べられました。

折原氏の研究発表は、「利益と損失の確率割引とリスク選択における“保険”の効果」をタイトルとして、日座保久氏(第一生命保険株式会社)と望月要先生(帝京大学)との共同研究の成果について紹介いただきました。発表では、確率割引とリスク選択における保険の効果が、実験と調査によって検討され、それぞれの研究で興味深い結果が見られました。両結果の相違点を検討する研究が望まれます。

時氏は、「確率的な多段階場面における選択行動」をタイトルとしてご発表いただきました。発表では、Budescu & Fischer (2001)の先行研究をもとに、繰り返しの選択場面における多段階くじ間の選好を検討した研究が報告されました。選択肢として、期待値の等しい確率高-低選択肢と確率低-高選択肢が用意され、多段階くじ選択において選好が変化する諸要因が、ITIのありなし条件の結果をもとに考察されました。

最後の話題提供として、八賀氏には、「消去選択肢への選好パルスと誘導、選択行動のシミュレーションモデル」をタイトルとしてご発表いただきました。発表では、選択行動研究において近年注目を集めている選好パルスに関する研究報告をなされ、並立スケジュールの選択肢の1つが消去である場合にも、選好パルスが発生することが報告されました。八賀氏は、誘導による Win-stay を特色とした強化子の誘導機能

説により、この選好パルスの説明を試みており、その妥当性がシミュレーションによって示されました。

以上が昨年の研究会の概要です。各話題提供の後は、例年通り、10～20分にわたって熱い質疑応答が交わされました。質疑応答が非常に活発になされるところが、本研究会の大きな特徴だと思います（研究会のホームページにある講演記録の多くには、この質疑応答の部分も記録されているので御覧ください）。様々な先生方からの鋭いご指摘に、経験の浅い大学院生は、たじたじとなることも（笑）。しかし研究活動においては、質疑にしっかりと答え、議論を展開できることは必須のスキルですから、良い意味での洗礼となるのではないのでしょうか。

通常の研究発表は、学会の年次大会で行われると考えられますが、本研究会は学会ほど形式張らずに、気楽に発表や議論ができる場を提供していきたいと思っています。学会での発表経験の少ない若手研究者に発表の機会を提供したり、研究成果が十分に出ていないような萌芽的なテーマについて意見を募ったりなど、比較的自由に発表や交流ができる研究会を目指しています。

研究会の参加人数は、例年20名前後ですが、引き続きこの参加人数を維持していければと思っています。そのために研究会としてもいろいろな工夫をしないとイケませんね。その試みの

一つとして、ここ数年は、研究発表だけでなく、研究会内外の方を講師としてお招きして、チュートリアル的な教育セッションの場を設けています。具体的には、研究方法のテクニックを紹介したり、関連する領域の研究内容をわかりやすく解説したりするセッションを開催してきました。上述した酒井先生の講演もこのような試みのひとつです。今後も、行動の定量的研究に関心を持つ研究者のニーズを捉えた教育セッションを提供できればと思います。

あと研究会開催日の前後に行われる懇親会のお店もそれなりに拘ってセレクトしています。参加される方は、研究会だけでなく懇親会での美味しいお酒と料理も楽しんでもらえればと思います。

興味があればぜひ研究会にご参加ください。そして参加だけでなく発表もご検討ください。研究テーマは幅広く募集しています。動物だけでなくヒトを対象とした実験的研究でも大丈夫です。ガチガチの基礎研究でなくても構いません。基礎と応用の懸け橋となるような **Translational** 研究も大歓迎です。

本年度の第24回研究会は、大阪市立大学で開催される日本行動分析学会年次大会後の9月12日（月）に開催予定です。前日（11日）の夜には、懇親会を予定しております。詳しくは研究会ホームページを御覧ください。奮ってのご参加をお待ち申し上げます。

<2016ABAI体験記>

ABAI第42回Chicago大会に参加して

風間梨沙
(常磐大学)

はじめまして。私は、常磐大学大学院人間科学研究科の修士課程に在籍する風間梨沙と申し

ます。このたび私がABAIに参加して研究発表をしたことに対して、日本行動分析学会から助

成金を賜りましたことに厚くお礼を申し上げますと思います。まことにありがとうございました。

私の研究のテーマは、ニワトリのヒナの刻印反応が、種に特有な反応ではなく、この反応に随伴する結果事象によって制御されるオペラント反応であることを明らかにすることです。今回の ABAI でもその内容でポスター発表をしました。

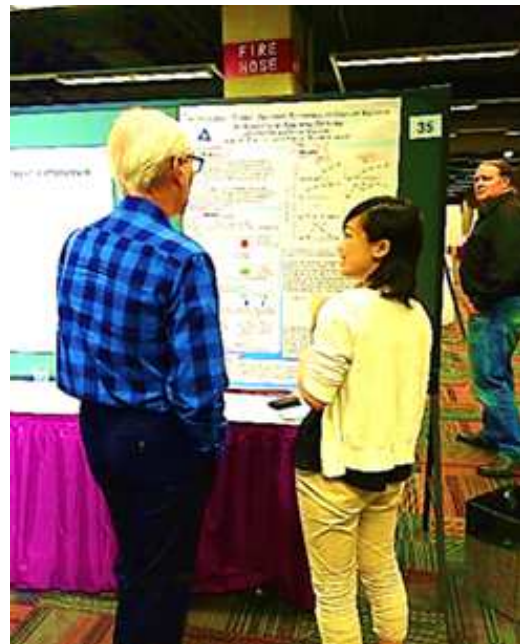
シカゴで開催された ABAI に初めて参加し、さらに国際学会ではじめて英語で研究発表したことは、私にとって、とても有意義な体験でした。しかし、はじめは不安でしかたがありませんでした。英語がうまく話せないことや、はじめの海外であったこと、連名発表者である森山哲美先生が、ご都合が悪くなって ABAI に参加できなくなり、自分一人で発表しなければならなくなったことで、不安で仕方ありませんでした。

しかし、不安に思いながらも、せっかくアメリカに行って研究発表するのだから、英語が得意でなくて、いろいろな失敗をしても、積極的に海外の研究者に話しかけてみる、ということを目指して ABAI での研究発表に挑戦しました。

私の研究発表は 5 月 31 日でした。発表原稿は用意していましたが、聞きに来てくださった方に、研究内容をちゃんと理解していただけるかどうか心配でした。研究内容は、先に述べたように、ニワトリのヒナが孵化してはじめて呈示された人工的な刺激に接近して接触することで、より頻繁にその刺激に接近するようになるかどうか、さらにその刺激に刻印づけられるかどうかを調べたものでした。

実際にポスターセッションが始まると、島宗理先生をはじめとする日本の方々、そして 3 名の海外の研究者も私の研究発表に耳を傾けてくださいました。緊張しながらも、なんとか発表を終えることができました。聞きに来てくださった方からは、研究について有益なご意見をい

ただいたり、研究とは関係のない質問(例えば、私の大学はどこにあるのか、といった質問)も受けたりしました。写真は海外の研究者の方が聞いてくださったときのスナップ写真です。研



究発表をとおして、さらに自分の研究を深めていこうと思いました。それと同時に、自分の英語力を高めていきたいとも思いました。

その他、いくつかのシンポジウムや講演に参加しました。特に、前からあこがれていた Schneider 先生の講演(演題は、“The real evolutionary psychology: Nature-nurture, behavior analysis, and the systems approach”)も聞きに行きました。Schneider 先生は、私の大学院の先輩の長谷川福子さんの刻印づけの研究発表になんども足を運んで聞きに来てくださって先輩を励ましてくださった先生です。私も Schneider 先生にお会いしてご挨拶したいと思っていたところ、ご講演終了後、幸いに先生に直接お会いしてご挨拶することができました。先生からは、「若い研究者と直接会って話ができるのがうれしい」というコメントをいただきました。とても感激でした。

学会関係以外では、食や観光を楽しみました。Chicago Pizza を食べに行き、とても美味しく頂きました。しかし、日本で食べる Pizza とは異なり、1 食の量が多く、小さな胃の持ち主で

ある私には食べきるのが大変でした。また、街並みも日本の街並みと異なり、なにか人工的過ぎる街並みのように思え、異文化を楽しむことができました。

また ABAI 恒例（と伺っています）の Beer SIG にも杉山尚子先生のお誘いで参加しました。ビールはあまり飲めないのですが、アメリカの地ビールということで少しいただきました。

以上、5日間のわずかな滞在でしたが、十分に有意義な ABAI とシカゴを体験することができました。

最後に、このたびの ABAI 参加ならびに研究発表に際して、お世話になった多くの方々に改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

<連載：いま、こんな職場で働いています（2）>

産業心理現場に活かす行動分析学

坊 隆史

（株式会社島津製作所）

私は島津製作所という企業で勤務しています。典型的な Business to Business 企業であり、お客様が官公庁や企業が中心で個人への小売が少ないため、あまりお聞きになられたことがないかもしれませんが、創業 140 年を超える精密機器の製造業です。そのような伝統ある企業に縁あって心理職として入職して 9 年目になります。当初は従業員の福利厚生としての役割を担うカウンセラーとしての採用でした。ところが今では安全衛生、組織改善、従業員教育などの人事業務へと広がり、担当地域も本社がある京都から全国、最近ではグローバル対応ということで世界へと展開しつつあります。日々慌しくありますが、心理職として世界を視野にいれた仕事ができるありがたみを感じています。今回、このニューズレターのご依頼をいただいたことをきっかけに自分の仕事を振り返ってみると、ずいぶん行動分析の考え方に助けられて業務をしていることに気づきました。

心理職として業務をするにあたってとくに意識しているのは、ところをまず“行動”から見立てる視点です。企業は利益を追求するために

経済性を重視します。客観的でクリアな世界観ですので、心理相談の場面であっても「人がここに抱えるもの」とか「こころの内面を探る」というアプローチでは上司はおろかご本人にも理解してもらえないことがあります。一方で課題や困りごとを行動の視点から説明すると理解してもらいやすくなります。例えば、ある従業員に遅刻が頻回にみられた場合、医療専門職は遅刻の原因を内面や疾病名から説明しがちです。しかしそれでは企業人への説明としては不十分なことがあります。そのような時、行動分析を参考に三項随伴性を図示化した解説をすることで、ご本人だけでなく関係者の理解を促進することができます。また「先月は遅刻を 5 回した」と問題行動を明確化することができ、さらには「今月は遅刻が 5 回から 3 回に減った」とご本人の努力を数値で表現することもできます。つまり企業内で起こる課題を行動の視点をもって説明していくことは、企業人と相性が良く、企業の心理職として私自身が成長するためにも役立ってきたのではないかと思います。

行動分析の観点は相談業務以外にも有用です。

例えば業務用車の事故があります。とくに公共交通機関が整備されていない地域の従業員は長距離運転を余儀なくされ、事故数はなかなか減りません。事故者には始末書を提出してもらい、教習を受講してもらいなどの取り組みをしてもなかなか効果がみられませんでした。そこで業務用車に乗る機会をわずかでも少なく、わずかでも時間を減らせないかと考えてみました。いわゆる環境調整です。関係者で考えた結果、これまで拠点から遠地でも時間をかけて業務用車で移動していた出張を、所々に駐車場を借りて自動車を置いておき（あるいはレンタカー）、そこまでは電車で行くというアイデアが出ました。一部の地域で実験的に試行してみると、途中までは電車移動できるため、事故が減ることがわかりました。また長時間の運転による疲労を防ぎ、長時間残業の抑制にもつながるのではないかと予測しています（残業抑制については仮説段階です）。

他にも管理職教育で「部下を褒めて育てまし

よう」と伝えても、「褒めるなんて甘やかしの元だ」、「自分は褒められることのないスパルタ教育で育ってきた」と反論があつたりします。そういう時には正の強化やシェイピングの考え方をを用いて説明することでうまくいきます。とくに私が所属している企業は理系の技術者が多いため、学術的に認められた方法論として行動分析を紹介すると驚くぐらい食いつきがいいと感じます。

これらの取り組みは行動分析をご専門とされている先生方のご著書（おおいに勉強させて頂いた書籍として島宗理先生の『パフォーマンス・マネジメント—問題解決のための行動分析学』（米田出版）など）を参考にして企業内で応用させたものです。私は行動分析を専門として訓練を受けてきた心理職ではありません。しかし企業の心理職として業務をする中で行動分析が使えることに気づき、今後も研鑽に励んで実践していくつもりです。企業内の心理職の実践例として何らかの参考になれば幸いです。

『行動分析学辞典』（出版企画）

武藤 崇
（同志社大学）

学会の出版企画として『行動分析学事典』を編纂することとなりました。出版元は丸善出版、公刊予定は2018年4月です。事典に収録予定の項目数は200、各項目5000字程度（図表も2点程度つける）となっております。項目内容は哲学から具体的な応用までをカバーしており、本邦では、ここ四半世紀の間、類書は公刊され

ておりません。

6月末に第1回の事典編纂企画会議を行い、現在、項目内容の選定作業をおこなっている最中です。本年秋ころには、学会員の皆様に、各項目に対する執筆依頼をさせていただくことになるかと思っております。皆様のご協力をよろしくお願いいたします。（文責：武藤崇）

2015年度事業報告

山岸 直基
(流通経済大学)

2015年度の事業報告をさせていただきます。6つの常設委員会別に記載いたしました。なお、2015年度事業報告の詳細、および貸借対照表、損益計算書については、学会ホームページ(学会概要、「公告」のページ)をご参照ください。

総務委員会

1. 一般社団法人日本行動分析学会設立、理事長および任期
2015年4月1日 一般社団法人日本行動分析学会設立
理事長および任期
園山繁樹(2015年4月1日~6月7日)
坂上貴之(2015年6月7日~2017年定時社員総会(ただし再任をさまたげない))
2. 理事会体制
総務委員会: 山岸直基、渡部匡隆、法務委員会: 井澤信三、島田茂樹、財務委員会: 園山繁樹、井上雅彦、渉外委員会: 眞邊一近、島宗理、企画委員会: 吉野俊彦、奥田健次、編集委員会: 中島定彦、武藤崇(以上、主管、副主管の順)、監査: 藤健一、森山哲美、野呂文行
3. 会員異動
会員 1,011名(2016年2月1日現在)
4. ホームページ委員会立ち上げ(総務委員会内)
委員長: 井垣竹晴(流通経済大学)、委員: 吉岡昌子(愛知大学)、八賀洋介(慶應義塾大学)、長谷川福子(常磐大学)

法務委員会

1. 細則の作成(代議員選挙および役員の選出)
2. 細則(選挙以外の部分)、会計処理細則、内規を検討した。
3. 次期に向けた選挙(理事・監事)のスケジュールを検討した。

財務委員会

1. 負債及び正味財産合計: 11,024,882円(2016年3月31日現在: 貸借対照表より)
2. 研究会助成(2件)
 - (1)「第23回行動数理研究会」(申請者: 井垣竹晴(助成額: 20,000円)、教育セッション: 酒井裕(玉川大学)、研究発表: 折原友尊(明星大学)、時曉聰・坂上貴之(慶應義塾大学)、八賀洋介(慶應義塾大学)、場所: 慶應義塾大学三田キャンパス、参加者30名(2015年8月31日))
 - (2)「第2回医療行動分析学研究会」(申請者: 鎌倉やよい(助成額: 30,000円)、教育講演: 坂上貴之(慶應義塾大学)、一般講演(4件)、場所: 愛知県立大学守山キャンパス、参加者45名)
3. 公開講座助成(3件)
 - (1)「関係フレーム理論(RFT)への招待: 明日から使える臨床行動分析のアイデア」(申請者: 武藤崇、名義後援のみ)、講演者: ニコラス・トールネケ(Niklas Torneke, MD)、場所: 同志社大学今出川キャンパス(2015年9月26日)
 - (2)「自閉症スペクトラムの子どもへの教育的支援」(申請者: 平澤紀子、名義後援のみ)、講師: 井澤信三(兵庫教育大)

学)、場所: 岐阜大学 (2015 年 11 月 14 日)

- (3) 「行動工学ワークショップ #1: インタラクティブデバスで学ぶオペラント実験装置の自作入門」(申請者: 吉岡昌子、助成額: 8,500 円)、講師: 吉岡昌子(愛知大学)、佐藤敬子(香川大学)、藤健一(立命館大学)、場所: 立命館大学朱雀キャンパス、参加者 12 名 (2015 年 11 月 29 日)

企画委員会

1. 年次大会

日本行動分析学会第 33 回年次大会、大会委員長: 竹内康二(明星大学)、場所: 明星大学日野校、参加者 386 名 (2015 年 8 月 29・30 日)

2. 学会企画シンポジウム

「日常行動に目を向ける行動分析という視点」、司会・話題提供: 坂上貴之(慶應義塾大学)、話題提供: 大河内 浩人(大阪教育大学)・藤 健一(立命館大学)、対話セッション・ファシリテーター: 三田地 真実(星槎大学)、指定討論: 伊藤 正人(大阪市立大学) (2015 年 8 月 29 日)

3. 一般社団法人設立記念事業

一般社団法人設立記念パネルディスカッション『特別支援教育と行動分析学の役割』、パネラー: 奥田健次(行動コーチングアカデミー)、園山繁樹(筑波大学)、田中裕一(文部科学省)、司会: 渡部匡隆(横浜国立大学)、場所: 法政大学市ヶ谷キャンパス (2015 年 8 月 28 日)

渉外委員会

1. 2015 年度「日本在住学生会員の ABAI/SQAB 参加に対する助成事業」助成対象者(助成金: 75,000 円): 岡綾子(関西学院大学)、時暁聴(慶應義塾大学)(以上 2 名)

2. 2015 年度「日本在住学生会員の ABAI 第 8 回国際会議(京都)参加に対する助成事業」助成対象者(助成金: 10,000 円): 遠藤美行(同志社大学)、吹田 光(法政大学)、中村 敏(大阪教育大学)、岩本佳世(筑波大学)、佐々木 銀河(筑波大学)、福田実奈(同志社大学)、雨貝太郎(筑波大学)、趙 成河(筑波大学)、富永大輔(筑波大学)(以上 9 名)

3. ニューズレター編集委員会の立ち上げ(渉外委員会内)

委員長: 眞邊一近、委員: 久保尚也(駒澤大学)、古野公紀(帝京大学)、小原建一郎(明星大学)

4. ニューズレター発行 (No. 78~81)

5. ABAI 支部として、ABAI に J-ABA 事業報告/事業計画書を提出 (2014 年度分)、ABAI 年次大会の ABAI Expo で J-ABA の活動を紹介するポスター展示、ABAI 年次大会中の各種ビジネスミーティングへの出席。

編集委員会

1. 機関誌発行 (2 冊)

第 30 巻第 1 号 (108 ページ)・第 2 号 (100 ページ)

2. 書籍出版

「ケースで学ぶ行動分析学による問題解決」(編: 日本行動分析学会、責任編集: 山本淳一、武藤崇、鎌倉やよい、出版社: 金剛出版) (2015 年 9 月 15 日)

その他:

会員へのお知らせ(会員集会への参加のお願い)

今年度も年次大会時に「会員集会」が開催されます。皆様のご参加をお待ちしております。ご存知の方も多いと思いますが、2014 年度までは年次大会において「会員総会」が開催されていきました。しかし 2015 年度に一般社団法人へ

の移行に伴い、「総会」の内容が変更されました。社員（代議員）を構成員とする「社員総会」を開催することが「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律」で定められており、「総会」に会員のみなさまが参加する機会がなくなりました。そのため、昨年度からは、年次大会において「会員集会」を開催し、理事会および社員総

会での会議の内容をお伝えする機会を設けています。事業報告および事業計画を中心に、学会の状況を知る貴重な機会となりますので、会員の多くの方々が年次大会の「会員集会」にご参加いただきますようお願いいたします。

(文責：事務局長 山岸直基)

編集後記

ニューズレターの編集委員の活動も、そろそろ1年となりました。ニューズレターの編集委員のお話をいただいたときは不安もありましたが、会員のみなさまに無事にニューズレターをお届けでき、ホッとしております。

今号も平岡先生の行動分析学の道にはいった理由、吉野先生のイギリス滞在記、医療・産業において行動分析学がどのように貢献で

きるのかを示唆する記事など、数多くの貴重な記事を掲載することができました。ご寄稿いただきました先生方に厚く御礼申し上げます。

今後もこれまで以上に読み応えのあるニューズレターをみなさまにお届けできるよう、編集部一同、務めてまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願い致します。(NK)

J-ABA ニューズ編集部よりお願い

- ニューズレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内、ギャクやジョーク、その他まじめな討論など、行動分析学研究にはもったいなくて載せられない記事を期待します。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニューズレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。
- ニューズレターに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトで公開します。
- 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。

〒369-0003 埼玉県所沢市中富南 4-25

日本大学大学院総合社会情報研究科

日本行動分析学会ニューズレター編集部 眞邊 一近

E-mail: manabe.kazuchika@nihon-u.ac.jp